

# ニューロモルフィックハードウェアとはどんなものだろうか？

日時：H30年 3月18日(日) 13:00～

最近、ディープラーニングをはじめとする人工知能（AI）に対する関心が高まっています。しかし、AIは大きなコンピューター資源と電力を必要とするために、脳を模した専用ハードウェアであるニューロモルフィックチップ開発が重要と考えられます。本シンポジウムでは、スピントロニクスを超え、ニューロモルフィックチップとはどのような素子であり、実際にどのような素子が提案・研究されているのか、更にその将来性について議論します。

## 【招待講演者 (仮タイトル)】

- 浅井哲也（北大）：ニューロモルフィックハードウェアの過去と現在および可能性のある未来像  
丸亀孝生（東芝）：配線層機能素子による脳模倣技術とニューラルネットワークへの展開  
森江隆（九工大）：ニューロモルフィックハードウェアのためのFeFETアナログメモリ  
遠藤哲郎（東北大）：スピントロニクス/CMOSの融合技術が切り拓く脳型VLSI  
野村光（阪大）：磁性体によるリザーバーの検討  
深見俊輔（東北大）：アナログスピンメモリ素子を用いた人工神経回路網  
常木澄人（産総研）：スピントルク発振素子を用いた新規演算素子

企画：応用物理学会スピントロニクス研究会 <https://annex.jsap.or.jp/spintro/>

世話人：宗片比呂夫（東工大）、谷川智康（東工大）、鈴木義茂（大阪大）、齋藤秀和（産総研）、森山貴広（京大）、三輪真嗣（大阪大）